

思／外

思
／
外

登場人物

【心理あるいは現実拒否と認可】

ヘン

ムー

ノギ

ニゴリ

ヨゴレ

【時間あるいは妄想】

四季

※作中では二役（初、晩）。

※一役でも構わない。

O P

舞台中央にぬいぐるみ。

ぽつんと、一人、佇んでいる。

そこに、四季登場。

無言でぬいぐるみを眺める。

しばらくの無言の時間。

スーパーの来店音。

ぞろぞろと入場する人物達。

舞台をぐるりと回り、四季を囲むようにして立つ。

一同 「いらっしやいませ〜(やまびこ)」

「ご来店ありがとうございます」

「本日は、お惣菜、お刺身が大変お安くっております!」

「こちらのカードをお作りのお客様は毎日のお買い物がなんと3%OFF!」

「おはようございます!」

「198円が一点、356円が一点」

「お客様、こちらの黄色いかごはご精算用となっております!」

「こちらの灰色のかごをご利用くださいませ!」

言葉は徐々に一団となり、てんでバラバラになる。

一同 「私は」

「レジに立っていた」

「ピロっと。音がする」

「ピロ。ピロ。ピロ」

「325円が一点」

「182円が一点」

「84円が二点」

「特売日じゃなくても」

「この店は納豆が安い」

「読み取りの済んだ商品を灰色のかごから」

「黄色のかごに移し続ける」

「閉店時間一時間前になると」
「もう少し値段の低い商品が並び始める」
「私は値引きのシールを貼っていく」
「お肉」
「魚」
「野菜」
「ポテトサラダ」
「焼き鳥」
「ピロ」
「ピロ。ピロ」
「今日は、何か作ろう」
「何か作って明日のお弁当にしよう」
「そうだ、部屋を片付けよう」
「ここしばらく掃除もしていない」
「玄関を掃除しよう」

苦しみ始める四季。
耐えられないという表情に。
ぬいぐるみを掴み、振り回す。
他愛のない会話が聞こえる。

「ねえねえ聞いてよ」
「ん？ なになに？」
「そうそう、彼氏」
「彼氏がねえ」
「家のことやってくんないんだわ」
「あ、ネギ買わないと」
「マジあいつ人殺しそうだよねえ」
「見て見てこの動画、超爆笑うける」
「だからね、旦那は嫁の言うこと聞きすぎてんの」
「ネギと、きのこ」
「掃除くらいいいじゃんねえ」
「別れちゃおっかなあ」
「だから、嫁があいつ死ねばいいのとか言ったら」
「マジで？ 別れるの？」
「あと何がいいかしら？」

「そんなのよりさ、これ見てよ、犬」
「殺しちゃうんだと思うんだよねえ」

「えゝ、それヤバくない？」

「えゝ、これマジ、ヤバゝい」

「マジで別れるの？」

「ねえねえ聞いてよゝ」

四季の苦しみ絶頂に。

繰り返される来店音。

繰り返される会話。

飽和する風景。

四季、堪りかねて倒れこむ。

静かになる風景。

ニゴリ 「私は私です」

ムー 「私は私です」

ノギ 「私は私です」

ヘン 「私は私です」

ヨゴレ 「私は私です」

ムー 「私は、私」

ヘン 「私は思い詰めていました」

ムー 「ええ、それはもう思い詰めていました」

ノギ 「詰めて詰めて詰まりに詰まり」

ニゴリ 「つまりは、」

ヨゴレ 「私は思い詰めていたのです」

ムー 「どのくらい？」

ヘン 「このくらい」

ヘン、ぬいぐるみを指差す。

一同、ぬいぐるみを見やる。

ヘン 「だから、私は分かれることにしました」

一同、やや広がり一列に。

ムー 「あら、私たち（ニゴリ&ヨゴレ）、少し様子が違うわね」

ヘン 「本当だ、ほんのり違う」

ニゴリ 「そうかな」

ヨゴレ 「どこが違う？」

ノギ 「だって、ほら」

ニゴリ&ヨゴレ、何気なく頬を触る。
すると二人の頬が汚れる。

ヘン 「汚れた」

ムー 「汚れたわね」

ノギ 「汚れたなら、私は私じゃない」

ヨゴレ 「そんなことない」

ニゴリ 「ただ少し汚れただけだよ」

ヨゴレ 「そうそう、ほら、拭けばいいの」

ヨゴレ、ニゴリ、お互いの顔を拭く。が、余計に汚れがひどくなる。
ノギ、ヘン、ムー。距離を取る。

ムー 「分かれましょう」

ニゴリ 「なんで、分かれる？」

ヘン 「汚れた私とは一緒にはいられない」

ノギ 「だから等分する」

ヨゴレ 「何等分？」

ヘン 「五等分？」

ムー 「二等分でいいでしょう」

ムー、舞台上を大きく指差し、

ムー 「ここから、こっちを、【思い】。ここから、こっちを、【外】（そと）」

ヨゴレ 「思いと外（そと）に分かれるの？」

ヘン 「思い切って他所（よそ）に分けるの」

ムー 「思いを切ってその他（ほか）に分けるの」

ニゴリ 「その他（ほか）は外（そと）なのかい？」

ノギ 「外（そと）はその他（ほか）で」
ヨゴレ 「その他（ほか）は外（そと）」
ノギ 「その、は要らない、外（そと）は他（ほか）」
ヘン 「じゃあ、それぞれに分かれましょう」
ムー 「私を二つに分けましょう」

四季、【思い】と【外】の間にドアで区切る。
ドアを見上げる二人。
ヨゴレ、戸を叩く。

ヨゴレ 「なにこれ？」
ニゴリ 「これは、ドアだ」
ヨゴレ 「思いと外のドア」
ニゴリ 【と】だ。思いと外の間にある。【と】
ヨゴレ 「閉まっちゃった」
ニゴリ 「締め出された」
ヨゴレ 「戸が閉まった」
ニゴリ 「扉が閉じた」
ヨゴレ 「ドアが閉まったら、入れないね」
ニゴリ 「入れない。開けてもらわないと」
ヨゴレ 「おーい！」

ヨゴレ、戸を叩く。
ドンドンドン。

ヘン 「なあに？ ヨゴレ」
ヨゴレ 「ヨゴレじゃないよ」
ムー 「（指をさし）いいえヨゴレよ」
ノギ 「（同じく指をさし）そしてニゴリだ」
ニゴリ 「なんでニゴリ？」
ヘン 「だって、汚れた体をしているわ」
ムー 「あなたは濁った目をしているわ」
ノギ 「だからニゴリとヨゴレ」
ヘン 「ニゴリもヨゴレも私には要らないわ」
ニゴリ 「なぜ？」
ヘン 「決まってるじゃない」

ノギ 「わかりきっているじゃないか」
ヨゴレ 「わかんないよ？」

ムー 「これだから【外】はダメなのよ」

ヘン 「ええ、まったくそうね」

ノギ 「私は、ピュアになるんだ」

ヨゴレ 「ピュア？」

ヘン 「純粹で」

ムー 「清廉で」

ノギ 「潔白な」

三人 「ピュア」

ノギ 「な」

ヘン 「思いが詰まってしょうがないの」

ムー 「だから広げないといけないわ」

ノギ 「自由に広げる、私を広げるのさ」

ニゴリ 「私を広げる？」

ヘン 「そう、私」

ヨゴレ 「私がこれ以上増えるの？」

ムー 「違うわ。詰まった思いを取り出すの」

ニゴリ 「何から？」

ノギ 「汚れた体から！」

四季、ノギ、ヘン、ムー、ぬいぐるみの腹から綿を引きずり出し、広げる。
その様を見つめる、ニゴリ&ヨゴレ。
広がった綿の中に立つ三人。

ムー 「さあ、これで広がった」

ヨゴレ 「ねえ」

ヘン 「まだいたの？」

ノギ 「どこかに行けよ」

ヨゴレ 「どこにも行かないよ」

ヘン 「いいえ、私は分かれた」

ムー 「分れたら、別れないといけないの」

ヨゴレ 「でも、一度別れちゃったら、元に戻るのは難しいよ？」

ヘン 「意見と同じく？」

ノギ 「発言と同じく？」

ムー 「恋人と同じく？」

ノギ 「友情と同じく？」

ヘン 「将来と同じく？」

ムー 「布切れと同じく？」

ヨゴレ 「布切れ？」

ムー 「縫い合わせないといけないもの」

ヨゴレ 「何を縫い合わせるの？」

ヘン 「布切れよ」

ヨゴレ 「布切れ？」

ノギ 「布切れは縫い合わせる」

ヨゴレ 「何と縫い合わせるの？」

ヘン 「布切れよ。決まってるじゃない」

ヨゴレ 「縫い合わせるとなんになる？」

ノギ 「袋になる」

ヨゴレ 「何を入れるの？」

ムー 「くるむのよ」

ヨゴレ 「何を包むの？」

ノギ 「ぬいぐるむ」

ヘン 「それを言うならぬいぐるみでしょ？」

ニゴリ 「ぬいぐるみ？」

ヘン 「ぬいぐるみよ」

ノギ 「これがぬいぐるみ」

ヨゴレ 「それは私でしょ？」

ムー 「いいえ、汚れたただの、布切れ」

ノギ 「だから捨ててしまう」

ノギ、ぬいぐるみをニゴリに投げる。

ヨゴレ 「なんにもない」

ニゴリ 「綿が入っていた」

ヘン 「そうよ」

ムー 「(思いに耽り) 思いに広がる私の綿」

ヨゴレ 「その綿ちょうだい。ぬいぐるみに包(くる)むから」

ムー 「私の綿をなんであげないといけないの？」

ヘン 「綿はどこにもありません」

ノギ 「私の綿は私達の中にあるんだから」

ヘン 「私の達を断ち切って持っていくことね」

ムー 「立ち入ったら泥棒よ？」
ノギ 「思いに入っちゃ泥棒よ」
ヘン 「泥棒は入れないのよねえ」
ムー 「泥棒だから入れないのよ」
ヘン 「(納得して) ああ、だから、お外にいるのね」
ムー 「そうだ、目玉だったら恵んであげるわ」
ヘン 「目玉は要らないものね」
ムー 「でも、綿はあげないから」
ヘン 「だからぬいぐるみはぺらんぺらんのまま」
ムー 「あら、それはかわいそうね」

四季、ぬいぐるみの目玉を引きちぎる。
目玉、転がる。

ニゴリ 「これじゃあ、何にも見えなくなる」
ヘン 「いいのよ」
ムー 「濁った目玉なんか要らないもの」
ノギ 「そんなもの付けてるぐらいなら、なにも見えない方がマシだ」
ヘン 「だから、そんな目玉は捨てるのよ」
ムー 「ニゴリもヨゴレも全部捨ててしまえば」
ノギ 「私はピュアでいられる」

ノギ、ヘン、ムー、意地悪げに笑い、自分の目に目隠しをする。
ニゴリ、ヨゴレ、三人を眺める。

ニゴリ 「これじゃあ、元に戻れない」
ヘン 「そうね、これじゃあ戻れない」
ヨゴレ 「私も分かつと戻らない」
ムー 「割って分かれて分かれてわれて」
ヘン 「私と私は他人の空似」
ヨゴレ 「似ても似つかぬ、他の人？」
ニゴリ 「いっそ、名前を変えようか」
ヨゴレ 「それは、さみしいね」
ニゴリ 「仕方ないさ」
ヘン 「私は私」
ムー 「私は私」

ノギ 「私も私」

ニゴリ、ヨゴレ、さらに汚れる。

ヘン 「なんの真似、それは？」

ムー 「なんの真似でもないわ」

ノギ 「じゃあ、あれはなんだい？」

ムー 「お外にいるから汚れたのよ」

ヘン 「お外にいると汚れるの？」

ノギ 「あんな姿になるなら絶対に外には出ないよ」

ニゴリ&ヨゴレ、異様な雰囲気。

ニゴリ 「お外にいる私はニゴリと言います」

ヨゴレ 「お外にいる私はヨゴレと言います」

思いの3人、外の二人と距離を取る。

ノギ 「私は私」

ヘン 「私は私」

ムー 「私は私」

ノギ 「(少し考えて)・・・試しに分けてみようか？」

ムー 「分けると戻らないんじゃないか？」

ヘン 「大丈夫。思いの中では別れない。私はピュアなんだから」

ムー 「それなら私を三等分」

ノギ 「ノギ」

ヘン 「ヘン」

ムー 「ムー」

ヘン 「ノギ」

ムー 「ヘン」

ノギ 「ムー」

ムー 「ノギ」

ノギ 「ヘン」

ヘン 「ムー」

三人 「ノギ、ヘン、ムー、は、私」

ヨゴレ 「私は分けると戻らないんだよ？」

3人、顔を見合わせる。

ややあつて、笑う。馬鹿にしたように。

ムー 「やっぱりお外の私はダメね」

ヘン 「ええ、あんなふうなことを言っているわ」

ムー 「ほうっておきましょう。汚れた私の言うことは」

ヘン 「いいえ。あれはもう私じゃないわ、汚れた他の人」

ノギ 「汚れた私は私じゃない」

ムー 「だから、あなたと呼ぶわ」

ヘン 「名案ね。私は私。あなたはあなた」

ノギ 「思いの中ではいつも一緒の」

ムー 「わ」

ヘン 「た」

ノギ 「し」

ノギ、ヘン、ムー、楽しげに笑う。

ヨゴレ 「三人いるのに一緒なの？」

ノギ 「(むっとして) 思いの中にいるんだから、当然だろう？」

ヘン 「だって、私はお外には決して出ないのだから」

ムー 「だったら、分れても問題ないわ」

ヨゴレ 「分かれた私とはなんでお別れしないの？」

ヘン 「なんでそんなことしなきゃいけないの？」

ヨゴレ 「ニゴリとヨゴレにはお別れしたのに？」

「ニゴリとヨゴレにはお別れしたのに？」

ヨゴレ 「ニゴリとヨゴレにはお別れしたのに？」

ゴレにはお別れしたのに？」

ニゴリ 「ニゴリとヨゴレにはお別れしたのに？」

二人の声、だんだんと消える。

ムー 「私はずっとここにいるの。思いの美しさは私をどれぐらい大切にしているか、ということに関わっている」

ノギ 「それなら、私は美しく純粋だ。だってこんなにも私を大切に思っているんだから」

ヘン 「大切なものと離れることなんか考えないでしょう？ 違う？」
ノギ 「いいや、違わない。大事なのは私。純粹で清廉潔白な私」
ムー 「だから、私はいつでもどこまでも一緒」
ヘン 「汚れ塗れ濁り澱んだ私はもう、ドアの向こうのお外にいった」
ノギ 「ドアを閉じて、私の思いの中でいつまでも」
ヘン 「どこまでも」
ムー 「思い思いの思いの綿を、広げましょう」
ヘン 「重ねるのね？」
ノギ 「重ねるのさ」

鍵のかかる音。

ヨゴレ、戸を叩く。

無言で佇む二人。

と、ヨゴレがぬいぐるみを拾い上げる。

ヨゴレ 「ぺらんぺらん」
ニゴリ 「ぺらんぺらんだ」
ヨゴレ 「ぺらんぺらんの、ぬいぐるみ」

ヨゴレ、ぬいぐるみのファスナーを開け、ひっくり返す。

ヨゴレ 「何にもないね」
ニゴリ 「なんにもない」
ヨゴレ 「何を入れる？」
ニゴリ 「綿」

ヨゴレ、あたりを探す。が、何もない。

ヨゴレ 「ないねなんにもない」
ニゴリ 「ないねなんにもない」
ヨゴレ 「ないねなんにもない」
ニゴリ 「ないねなんにもない」
ヨゴレ 「ない」
ニゴリ 「思いの外にはなんにもない」
ヨゴレ 「綿はどこにあるの？」

ニゴリ 「思いの中にしかない」

ヨゴレ 「思いの外にはなんにもない」

ニゴリ 「・・・取りに行こうか？」

ヨゴレ、戸を叩く。

ヨゴレ 「戸は開かないよ？」

ニゴリ 「戸は締まり、

ドア

の向こうは私が重ねる思いの綿、
まみれ、

綿に塗れた私、

は思いの中に閉じこもり、

純粹無垢な私になる白く白く、(☆カラフルな)

どこまでも純粹な白(☆彩り)

の思いの綿、さ」

ヨゴレ 「綿は広がる？ どこまでも？」

ニゴリ 「ピュアな綿がね、広がるんだ」

ヨゴレ 「(ドアを指し) どうやって入るの？」

ニゴリ 「(ヨゴレを指し) ヨゴレはヨゴレ」

ヨゴレ 「ニゴリはニゴリ？」

ニゴリ、目玉を指す。

ヨゴレ 「目玉？」

ニゴリ 「ニゴリは目玉だ」

ヨゴレ 「濁った目玉？」

ニゴリ 「つまり、私が捨てた。これは、【し】だ」

ヨゴレ 「【し】って何さ？」

ニゴリ 「【し】は視界の【し】。視野の【し】」

ヨゴレ 「だから、目玉は捨てられちゃったの？」

ニゴリ 「目玉は捨てられない。ずっとくっついてる。顔の前に」

ヨゴレ 「じゃあ、隠してるんだね」

ニゴリ 「ああ、そうさ。隠してる」

ヨゴレ 「あるのにキチンと隠したんだね」

ニゴリ 「(ヨゴレの手にある目玉を指し) ねえ、汚れが持ったら【し】が汚れるよ」

ヨゴレ 「(ややムツとして) じゃあ、ニゴリが持てばいいじゃない」

ヨゴレ、ニゴリに目玉を渡す。

ニゴリ 「(にやりと) そう、それが正解。ニゴリが【し】を持つと【し】が濁る」
ヨゴレ 「(馬鹿みたいな顔) ???」

ニゴリ 「・・・だから、【し】が濁るんだよ」
ヨゴレ 「??????」

ニゴリ 「・・・【し】を濁らせてみなよ」
ヨゴレ 「・・・・・・・・・・じ？」

ニゴリ 「その【じ】を戸に貼り付けてみなよ」

ヨゴレ、目玉を戸にくっ付ける。

ニゴリ 「どうだい？ 見えるかい？」
ヨゴレ 「見えないよ。戸締りが万全で」

ニゴリ 「そうかい、それなら、もつと濁ってごらん」
ヨゴレ 「(考える) ・・・？ ・・・ドジ？ (はつとして) ・・・ドジを踏むのを待つんだね！？」

ニゴリ 「【し】を貼り付けて、戸締りのドジを見逃さないようにするんだ」
ヨゴレ 「目を凝らさないと」

ニゴリ 「ドジを見つけたら思いの中に入り込む」

ヨゴレ 「黙って入り込むの？」

ニゴリ 「そうさ。正面から行っても入れてくれないからねえ」

ヨゴレ 「・・・それじゃあ、泥棒じゃないの？」

ニゴリ 「そりゃあそうさ、泥棒さ」

ヨゴレ 「泥棒になるしかないの？」

ニゴリ 「お外の手は汚れてるからね。しょうがない」

ヨゴレ 「汚ない手で綿を掴むの？」

ニゴリ 「掴んだ綿を、また、ぬいぐるみに入れよう」

ヨゴレ 「でもこんな手で掴んだら汚れちゃうよ？」

ニゴリ 「いいんだよ。そうしたら、汚れた綿が私になる」

ヨゴレ 「私を詰めるの？」

ニゴリ 「ああ。また五人一緒にぬいぐるみに詰まるんだ」

ヨゴレ 「分かれた私とまた一緒になれるの？」

ニゴリ 「そうさ。思いと外は一緒になる」

ヨゴレ 「でも、泥棒になって思いに入るのは、ちょっぴり気が引ける」
ニゴリ 「それなら、礼儀正しくすることにしよう」
ヨゴレ 「泥棒に礼儀もないじゃない」
ニゴリ 「それでも中に入るには、ノックをしないとイケない」
ヨゴレ 「ノックをしながらドジを踏むのを待つんだね？」
ニゴリ 「そうさ、私の誰かがドジを踏めば、私は思いに入ることが出来る」
ヨゴレ 「じゃあ、ノック！！」

ヨゴレ、ぬいぐるみを腰にくくる。
ニゴリ&ヨゴレ、ドアをノックする。

【盲目的な春に関する考察】

春のざわめき。

小鳥の鳴き声。

さわやかな春の陽気。

四季（春）、軽やかに登場。

四季が歩くたびに、涼やかな音色が聞こえるようである。

四季、目の前に広がる春の情景を眺める。

初

「春の話。ぬるい風。ゆったりと」

晩

「しかし、確かな感触を伴ったやわらかい風」

初

「その風を感じる、出会いの予感。」

アスファルトが黒く、淡く光る。真新しいスニーカーに足を入れ、踏み出す。

一步一步がまるで、今までの自分からサヨウナラを告げるみたいなの

「・・・ううん。新しい自分とはじめましてをするような気恥ずかしさを感じる。予感」

晩

「うーん、予告のようなものだという、体感。心で感じるのではなく、体が感じて

初

いる。心は踊らない。その代わりに確かに、体が踊っていた。確かに踊る

るように足は運ばれる」

「桜」

晩

「水仙、ツツジ」

初

「アスファルトの匂い」

晩

「出会いの、匂い」

初
&
晩

「新しい風が吹く。薫風はどこまでも抜けるように爽やかで、その香りを嗅ぐ

ためには、新しい環境や、新しい人と出会うことが必要不可欠。新しい風景

はどこかに出向かなければ見えない。その風景を見るという期待が、心を躍

らせる」

「新しい、私の部屋。この場所からどんな出会いが生まれるのだろう。この場

晩

所はどんな出会いで満ちるのだろう。そう考えると、ワクワクやら、ドキド

キやら、他にもいくつもの胸の高鳴りの種類の多さにわけがわからなくなる。

まだ、簡単な生活用品しか揃っていないこの場所は、どんな思いでいっぱい

になるのだろう。春は、出会い」

「春は、出会うのだ。私の思いを部屋いっぱい満たして。全部のドアを開け

初

放って、出会いの春を迎えるんだ」

柔らかな表情の四季。
だが一転して、鋭い顔に。

晩 「と、思っていた。でも、新しい部屋のデビューから、年月が経てば否が応で

もわかる。出会ったら、別れなければならぬ。

冬の孤独の向こうに、春がある」

初 「ひとりの寂しさからからようやく抜け出たのに、なんで出会いと別れが一緒にいるのだろうか？ 理不尽な話。出会いは別れの予感といつも一緒」

晩 「なぜそんな馬鹿なことがありうる？」

初 「辛い時期の向こうには必ずご褒美があるものでしょう？ 孤独の辛さは成長すればするほどどんどん如実になっていく。冬の寒さは年々深く深く、私の身をえぐり続け、やがて寒さに麻痺して、孤独であることさえ忘れる」

晩 「そうなたら、この部屋はもう、出会いの予感に満ちることはなく、ただぼうぼうとした孤独だけが、漂い続けるだけだ」

春が来る。今年も懲りずに春が来る」

ノックの音が響く。

ドンドンドンドン。

四季、ぼんやりとノックを感じて、

晩 「私はいつのころからか、春の出会いに期待を感じることをやめた。・・・春だけじゃない。もう、新しい出会いとかそんなものに期待することなんか無意味だ。どうせ、冬には一人なんだから。

初 「そうだ、それならいつそ、鍵を掛けてしまおう。ドアにも、窓にも、心にも」

晩 「・・・瞼にも」

初 「開かなければいい。空いているドアは無用心だ。泥棒が入るかもしれない。大事なものが盗まれるかもしれない」

晩 「大事なものの・・・？」

初 「何かあったけ？」

晩&初 「・・・ああ、そうだ。絵本」

ムー、四季の目の前に絵本をもって現れる。

ヘン 「そのお話がとても好きだった。お母さんがよく読んでくれた、お話」

ムー 「思い入れがあるの？」

ヘン 「思い入れがあるの」

ムー 「そのお話があればいい？」

ヘン 「春にはその思い入れさえあればいい」

ムー 「じゃあ、しましょう。思い入れ」

同時に、ノックの音が響く。

ノックの音が高まる。

ドンドンドンドンドンドン・・・

完全に無視するヘン＆ムー。

ムー、ヘン、絵本を開く。

ヘン 「お母さんはいつもこのお話を読んできました。何度読んできたのかわからないくらい、私はこのお話を何度もお母さんにねだって、寝る前には必ず聞いていました。思い入れ。そう、とっても思い入れのあるお話」

ヘン、子供に、ムー、母となる。

ムーのそばに近寄るヘン。

ムー 「このお話したらいい子で眠るのよ？」

ヘン 「私はいつもいい子だよ？」

ムー 「じゃあ、いつもより、いい子でお眠りなさい」

ヘン 「はい」

ムー 「むかしむかし、遠い海の方こうにとある小さな国がありました」

ヘン 「どのくらい遠いの？」

ムー 「うーん。ずっと、よ。ずっと遠くにあるの」

ヘン 「だから、それはどのくらいの距離なの？」

ムー 「海を超えるぐらい遠いのよ」

ヘン 「どの海？」

ムー 「大きな海」

ヘン 「小さな海なんてないでしょ？」

ムー 「笑って」 そうね。海は広いし大きいものね」

ヘン 「お母さんはいつも優しく、私はいつも甘えてばかりいました。うーん、わがままばかりだったかな・・・恥ずかしながら」

ムー 「続きは聞かないの？」

ヘン 「聞くよ。話していいんだよ。ちゃんと聞いているから」

ムー 「静かに聴いてるのよ？」

ヘン 「努力します」

ムー、やや改まり、

ムー 「その国に住む人たちは皆、心が強くありませんでした。何か困ったことや、悲

しいことがあると、すぐに泣いたり、くよくよ落ち込んだりしてばかり。国中の人が流す涙で、ほとんどの家の包丁や鍋やカナヅチは錆だらけでした」

ヘン 「じゃあ、汚い色の国ね？」

ムー 「そう、錆の色は汚い色」

ヘン 「汚いのは嫌だわ」

ムー 「いつも錆だらけの汚い国の中で、一軒だけある鍛冶屋さんは、それはもういつもいつも大忙しでした」

ノギ登場。鍛冶屋に扮する。

ノギ 「(大きなため息) 参ったなあ。こんなに毎日毎日、お客さんに来られたら、休む

暇がなくなってしまう。そうになったら寝る暇もなくてクタクタになって倒れてしまう。そうしたら、仕事ができなくなって、そうすりゃあお金も稼げなくなつて、そうしたら、もうお店どころじゃなくなっちゃう。ああ、どうすりゃいいんだ・・・」

ヘン 「鍛冶屋さんも心が弱いのか？」

ムー 「いつもメソメソしている鍛冶屋さん。自分の将来のことを考えると夜も不安で眠れません。けれども、お客さんは毎日毎日ひっきりなしにやつてくる」

ドンドンドンドン！

ノックに怯えるノギ。

ノギ 「どうすればいいんだあ！！！」

ノギ、大泣き。

ヘン 「これじゃあ、鍛冶屋さんがかわいそうよ」

ムー 「でも、そんなある日、鍛冶屋さんはずっとも素晴らしいことを閃いたのです」

ノギ 「そうだ！ この真っ黒な鉄をみんなの心に打ち付けてあげればいいんだ。そうしたらみんなの心は誰にも負けない強い心になる。心が強ければ、涙を流さなくて済む。そう、鉄の心を手に入れるんだ！」

ムー 「いいことを思いついたと、次の日から、鍛冶屋さんはさっそく仕事にかかりました」

ノギ、心に鉄を打ち付ける。

カーン、カーン、カーン。

と、

ドンドンドンドン！

はっとする一同。

ノギ 「ちよつと待ってくれ！ 今、手が離せないんだ！」

ヨゴレ 「そんな事言わないで、開けておくれよ」

ノギ 「手を離すわけにはいかないんだ、大事な仕事の最中なんだ！」

ヨゴレ 「鉄なんて打ち付けてないで、手伝っておくれよ」

ノギ 「何を手伝うんだい？」

ニゴリ 「担ぐんだよ」

ノギ 「何を担ぐ？」

ヨゴレ 「こっちの棒をね、担いで欲しいんだ」

ノギ 「その棒はなんの棒だい？」

ニゴリ 「決まってるじゃないか」

ヨゴレ 「泥にまみれた片棒さ」

ノギ 「なんだって？」

ムー 「（強く）鍛冶屋さんはさっそく仕事にかかりました！」

ヘン＆ムー、鍛冶屋のように鉄を打ち付ける。

カーン、カーン、カーン

ムー 「毎日毎日休まず働いた鍛冶屋さん。だんだんとお客さんは減っていき、最後のお客さんがサヨウナラを言って、お店から出て行きました」

ヘン 「心の強い国になったのね？」

ムー 「ええ、だってもう、みんなの心は鉄の心なんですもの。小さなことでは落ち込みもしないし、涙も流さない。国の錆はどんどん減っていき、町の錆はひとつもなくなり、とっても綺麗になっていきました」

ムー 「包丁はよく切れるし、鍋も丈夫で壊れない。みんな鍛冶屋さんに感謝しました。そして、鉄の心を持った国みんなは毎日毎日あくせく働き、国の領土をドンドン広げて行きました。そして、その国は大陸で一番の強い国になったのです」
ヘン 「素敵。やっぱり綺麗なのが一番強いよね」

ムー 「そう。鉄のように強い心があればどんなことでも怖くない」

ヘン 「私、鉄の心になるわ!」

ムー 「そうね、そうしたらキレイになれるわ」

ヘン 「私は、このお話をいつも聞いていた。だから、私はいつも強い心でいられるよう心がけた。つまらないことで泣かないように。強く、強く、い続けるようにつとめたの。純粹に、強く、鉄の心を手に入れたのよ」

ムー 「じゃあ、もう眠りましょう?」

ヘン 「鉄の心は眠らないのだ!」

ムー 「いつまでも熱いとそれはそれで弱くなるのよ?」

ヘン 「え!? そうなの? じゃあ、おやすみ!」

ムー 「はい、おやすみなさい」

夜が更ける。

ノックの音。

ドンドンドン

ノギ、ぼんやりと顔を上げる。

ノギ 「誰だい?」

ニゴリ&ヨゴレ、ノギの近くへ。

のんびりとノギに近づく。

ノギ 「お客さんかい? ああ、でもそんなわけはないか。だってこの国のみんなはみーんな鉄の心の持ち主だ。私の役目は終わってるんだから、お客さんなわけがない」

ヨゴレ 「ドジを踏んだねえ、鍛冶屋さん。人の心を強くしたのに、自分の心は弱いまま」
ノギ 「しょうがないだろ? この国には私しか鍛冶屋はいないんだ。私の心を鉄にしてくれるやつは誰もいない」

ヨゴレ 「いつまでも弱いまんまの、かわいそうな鍛冶屋さん」

ノギ 「いいんだよ。国は強くなった。みんなも泣かなくなった。もう錆は浮かない。綺麗なもんだろ?」

ヨゴレ 「じゃあ、鍛冶屋さんの体は錆だらけ?」

ノギ 「ああ、そうさ」

ヨゴレ 「じゃあ、鍛冶屋さんは汚いんだね?」

ノギ 「ああ、私は汚いよ。この国で一番弱くて汚いんだ」

ニゴリ 「そうかい、そりゃあ、よかった」

ニゴリ、おもむろにノギの体を汚す。
驚くノギ、ノギ、鍛冶屋さんの扮装を解く。

ノギ 「待つて！ 今のはお話の話だ！ 私が思い入れたお話の話だ！」

ヨゴレ 「自分で言ったんだよ？ 私は汚いって」

ニゴリ 「だから汚れた」

ヨゴレ 「錆は汚いんでしょう？」

ノギ 「こんなの汚いぞ！」

ヨゴレ 「汚いよ？ 私は汚い。汚くなった。残念だねえ、鍛冶屋さん」

ノギ 「そんな・・・これじゃあ、私は私の中にいられないじゃないか！」

ヨゴレ 「それはどうかなあ？」

ノギ 「（悔しさ半分悲しさ半分）もう、私は私の中にいられない・・・」

ニゴリ 「それはそうでもないさ」

ノギ 「え？」

ヨゴレ 「棒を担いでくださいな」

ノギ 「棒？」

ヨゴレ 「外の私は泥棒になったの」

ノギ 「・・・何を盗むんだ？」

ヨゴレ 「（あたりの綿を取り上げ）私の綿が欲しいの、私」

ノギ 「なんで？」

ヨゴレ 「ぺらんぺらんのぬいぐるみに汚れた綿を詰め込みたいのよ、私は」

ノギ 「詰め込む？ それでどうする？」

ヨゴレ、ノギの目隠しを外す。

ノギ 「何するんだ！」

ヨゴレ、ノギに飛び掛る。

ヨゴレ 「春に失くした目玉はね、失くしたんじゃないで、隠したんですよ？」

ノギ 「失くしたんだ、捨てたんだ。そんなものは」

ヨゴレ 「じゃあ、このお目目はなあに？」

ノギ 「これは・・・」

ヨゴレ 「捨てない消えない失くならない。しっかりついでる。

目玉は隠せても、そこにあるんだよ？ ほら、ここにはちゃあんと目玉がある」

ヨゴレ、ぬいぐるみの目玉をちらつかせる。
ノギ、それを見て見ぬふりする。

ノギ 「(何も言い返せない)・・・」

ヨゴレ 「だからさ、隠せばいいじゃない？」

ノギ 「ヨゴレを？」

ヨゴレ 「そう、ヨゴレを」

ノギ 「ヨゴレを隠して汚れと付き合うのか？」

ヨゴレ 「汚れた関係はドキドキするでしょ？ 隠さないと私と一緒にいられないんだから？」

ニゴリ 「私ならきつと汚れた私も大事にしてくれるさ。

私はまだ思いの中にいるんだから」

「だから、よろしくね？」

ヨゴレ 「私が他の私の目を逸らし、」

ヨゴレ 「外の私が目を盗んで綿を盗む」

ノギ 「私は？」

ニゴリ 「私は、もうピュアじゃない」

ノギ 「本当に？」

ヨゴレ 「だって、汚れちゃったよ？」

ノギ 「・・・そう・・・私は・・・」

ニゴリ&ヨゴレ、去る。

呆然とするノギ。

目隠しを見るが、付けようとせず、ポケットに突っ込み、去る。

【夏に関する盲目的考察】

夏の日差し。ギラギラと照りつける。
 蝉の声。混ざって聞こえる風鈴の音。
 四季、麦わら帽子をかぶる。
 暑そうに汗を拭い、

初 「夏が来た」
 晩 「春がはじめてましてだとするならば、夏は圧倒的に」
 初&晩 「こんにちは」
 初 「朝と夜を繋ぐようにこんにちはの挨拶をする」
 晩 「挨拶をした分、太陽は空高くから決して落ちることなく、私にギラギラとした日差しを浴びせ続ける」
 初 「だから、こんにちは」
 晩 「と、私は四方に向かって挨拶をするのだ」
 初 「晴れやかな顔した向日葵に」
 晩 「涼しい顔した朝顔に、緑色の虫取り編みにも」
 初 「カゴいっぱいに入った油蟬にも」
 晩 「遠くの水平線のおっきな入道雲にも」
 初 「大きな声でこんにちは！！」
 晩 「昼間は長く、どこまでも長く」
 初 「涼しさなんて一辺もなく」
 晩 「純粋な日差しで包まれる」
 初&晩 「暑くて」
 初 「どこまでもオレンジ色の日差しを眺めると」
 初&晩 「眺めた分だけ私は、あの頃に戻っていくような感覚になる」
 ヘン、登場。四季と同じ麦わら帽子をかぶる。
 晩 「思い出す。夏が来ると思い出す」
 初&晩 「あの頃」
 初 「いつの頃だったのかも忘れてしまった」
 初&晩 「あの頃」
 初&晩 「あの頃はあの頃で」

初 「あの頃以外の何物でもなくて」
晩 「それが具体的に何歳で、どの場所のことだったかなんてことは本当にどうでもいいことで」

初 「だから、好き勝手にいつも思い出すんだ」

初&晩 「あの」

晩 「素敵な夏の思い出を」

初 「いつかに必ずあったであろう」

晩 「あの思い出を」

初 「きっと、多くの人が懂れたり」

晩 「思い描いたり」

初 「あるいは、本当に体験したことのある」

晩 「あの風景を、あの匂いを」

初&晩 「つまりは、あの夏の、あの頃を」

晩 「夏にはこんにちは」

初 「あの思い出にこんにちは」

ムー、登場。ヘンを追いかけて、寄り添う。仲のいい風景。

ヘン 「こんにちは！」

ムー 「あら、こんにちは」

ヘン 「どこに行くの？」

ムー 「んゝゝゝどこに行くか、一緒に考えてくれる？」

ヘン 「もちろんいいわ」

ヘン&ムー、二人ではしゃぎながら歩き回る。

その様子を眺める四季（晩夏）。

初 「あの子の名前はなんだっけ？」

晩 「忘れてしまった」

初 「あの子の名前はなんだっけ？」

晩 「覚えていない」

初 「ずっと昔のあの頃のことを、その大体多くのことを大概忘れてしまつて、もうどうしようもない」

晩 「仮に」

初 「どこか布切れの切れ端みたいな思い出を引っ張り出したところで、その切れ端はどこにも繋がってはおらず」

晩 「その端（たん）はなんの発端にもならない」

初 「端的で」

晩 「簡単で」

初 「単純ないつかの思い出」

ムー＆晩 「もう宿題は済んだ？」

ヘン＆初 「いいえ、まだ」

ムー＆晩 「あら、そうなの？」

ヘン＆初 「だってせっかくの夏休みよ？ 宿題ばかりじゃ退屈だわ」

ムー＆晩 「最後の日になっても手伝ってあげないよ？」

ヘン＆初 「え？ それは困る」

ムー＆晩 「じゃあ、今からやりましょ、ね？」

晩 「この子の名前はなんだっけ？」

初 「この子の名前はなんだっけ？」

晩 「視線に入った黒の棒」

初 「顔を隠した横の棒」

晩 「顔が見えなきや名前もない」

初 「名前がないなら、勝手に付ける」

晩 「じゃあ、あなたは恵ちゃん」

初 「あなたは聡美ちゃん」

ムー（聡美） 「恵ちゃんはおの子のことが好きなんでしょう？」

ヘン（恵） 「（驚き）そんな事ないわよ！ 聡美ちゃんったら何を言い出すの？」

ムー（聡美） 「だって、良枝ちゃんがそう言っていたわ」

ヘン（恵） 「（慌てて）良枝はいつも適当な事ばかり言うのよ」

ムー（聡美） 「でも、恵ちゃんは良枝ちゃんにはなんだって話すんでしょう？」

ヘン（恵） 「それ、良枝が言ったの？」

ムー（聡美） 「ええ、そうよ、あ、ほら、噂をすれば！」

四季、良枝に扮する。

四季（良枝） 「あら、めぐに聡美じゃない？ なにしてるの？」

ムー（聡美） 「今ね、ちょうど良枝ちゃんの話をしていたのよ？」

四季（良枝） 「なに？ 悪口じゃないでしょうね？」

ムー（聡美） 「違う違う！ 恵ちゃんの好きな人の話」

四季（良枝） 「（驚いて）ちよっと！ その話は誰にも内緒って言ったのに、なんで

ムー（聡美） よりにもよって本人に話しちゃうのよ！？」

ムー（聡美） 「（意味がわからないというふう）え？ だって、恵ちゃんに好きな人

がいるのは本当なんでしょ？ それを確認しただけじゃない？ 何が
いけないの？」

四季（良枝）

「あんた勉強できるくせになんでそういうところに頭が回らないの？」

ムー（聡美）

「ごめん、なんか悪いことした？」

四季（良枝）

「したわよ！ あゝ、もろ・・・」

ヘン（恵）、怒っている。

四季（良枝）、なんとかごまかそうと、

四季（良枝）

「あゝ、あれよ！ あれ！ きつと、だれか他の人と間違えちゃったの
よ！ ね？ 聡美？」

ムー（聡美）

「え？ 恵ちゃんの話でしょ？ 違うの？」

四季（良枝）

「だから、あんたは、もう！」

ムー（聡美）

「（ようやく察し）あ、あゝゝゝゝ、そう、そう、あのね、あれよ、恵ち
やんって言っても恵ちゃんのことじゃないのよ？ ね？ あれ、あれ
よ、恵ちゃんのことじゃないのよ？ ねえ、ねゝゝゝ、決まってるじ
やない、恵ちゃんの好きな人なんて知らないことぐらい知ってるじや
ない、知ってるじゃない？ ねゝ、恵ちゃん、恵ちゃんじゃなくて、
メ、メ、メ、」

突然、風鈴の音。

物売りの格好のヨゴレ登場。

ヨゴレ 「いらんかねゝゝゝ。いらんかねゝゝゝ」

ムー（聡美） 「あ！ かき氷！」

四季（良枝） 「かき氷食べましょ！」

ヨゴレ 「いらんかねゝゝゝ。いらんかねゝゝゝ」

ムー（聡美） 「ねえ、早く！」

四季（良枝） 「早くこっちにいらつしやいよ、め」

ヨゴレ 「目玉、いらんかねゝゝゝ」

ヨゴレ、目玉を取り出し、差し出す。

静止する一同。

蟬の音が大きくなる。大きくなるにつれてノックの音が聞こえる。

突然、雷。

風が強く吹き、雨が降る。
一同、雨宿りできる場所を探し、落ち着く。
この間、ヨゴレはどこかに去る。
激しい雨を見上げる三人。

ヘン（恵） 「（ぼそりと）・・・別に」

四季（良枝） 「え？」

ヘン（恵） 「怒ってなんかいないよ」

四季（良枝） 「・・・」

ヘン（恵） 「ただ、ちよつとショックだっただけで」

四季（良枝） 「・・・ごめんなさい」

ヘン（恵） 「いいの。いいんだよ、別に」

四季（良枝） 「・・・うん」

ヘン（恵） 「私ね、告白、する」

四季（良枝） 「え？」

ヘン（恵） 「決めたの、夏まつりの日に、告白する」

ムー（聡美） 「応援するよ！」

ヘン（恵） 「うん。ありがとう」

ムー（聡美） 「宿題もやっつけなきゃね」

四季（良枝） 「そうだ、自由研究！」

ヘン（恵） 「今年はどうなのにしようか？」

ムー（聡美） 「そうねえ」

三人、わいわいと話し合う。
だんだんと雨の音が強まり、声は聞こえなくなる。

初 「あの子の名前はなんだっけ？ 湧き出す思い出にはなんの名前もない。いくらでも溢れ出す。私の焦がれた夏の景色。私はあの子じゃない。その子でもない。どの子でもない。この景色の中に、私はいない。けれど、これは私の思い出だ。思い出を出してしまえば私の物だ。そう、それを口にしてしまえば、なんだって私の物だ」

晩 「私物の思い出。そつと思ひ描き、しまいこんだ、誰にも見せない。思いのスケッチ。夏の思い出思い描く。偽物の私の私物。日差しの中に私はいない」

初 「向日葵畑に私はいない」
晩 「神社の中に私はいない」

初 「砂浜の中に私はいない」

初&晩 「ひしめき合う夏の風景の中、私は空白。ただ純粋な白で描く。私の姿。顔も名前もなくても、私の閉じた瞼の裏にはしっかり描かれているのだ、私だけの、夏の景色が」

夏祭り。

四季&ムー、ヘンを励まし風景の一部へ。

林檎飴売り、お面屋さん、太鼓の音。人のざわめき。

ヘン、ドキドキしている様子。

あちらを見たりこちらを見たりと落ち着かない。

そこにノギが現れる。ヘンとは違う意味で落ち着かない様子。

ノギ、ヘンの姿を認める。

ヘン、笑顔になる。が、どこか恥じらいを見せながら、ノギに近付こうとする。

祭囃子の音が鳴り響く。

そこに、

ノックの音。

驚くノギ。

静止する風景。

林檎飴売り、お面屋さん、それぞれヨゴレ&ニゴリへ。

ヨゴレ&ニゴリ、ゆつくりとノギに歩み寄る。

ヨゴレ 「いらんかねえ。いらんかねえ」

目玉を一つ、いらんかねえ

目玉を二つ、失くしたねえ」

ニゴリ 「(周囲を見つつ) こんな古臭い思い出、何が楽しいかねえ」

ヨゴレ 「違うよニゴリ、これは思い描き」

ニゴリ 「そうかい、思い出を描いたのか」

ヨゴレ 「ろくな青春送れなかったのかな？ だから思い描くのかな？ お絵かきは自由にできるから」

ノギ 「そうだ、自由だ」

ヨゴレ 「思いの中ではなんでも自由？」

ノギ 「なんでも自由」

ヨゴレ 「自由な思いの中だものね」

ノギ 「誰も入れない。誰も知らない。この思いは」

ニゴリ 「知っているのは私だけ」

ヨゴレ 「たとえノックがあっても出なければいい」

ニゴリ 「聞かぬ存ぜぬ」

ヨゴレ 「違う違う。そこは、見えぬ存ぜぬだよ」

ニゴリ 「(納得して) 見えると損をするから目玉を隠すのかい？」

ヨゴレ 「瞼でしっかり蓋をするんだね」

ノギ 「こんな目玉はあるだけ無駄。無駄どころか・・・苦しいだけだ」

ニゴリ 「苦しい？」

ノギ 「汚れた私にはわからない」

ヨゴレ 「わからない。だって外にいれば汚れるのは当たり前でしょ？ 汚

れるのが苦しいのに繋がるなら、私を外に出さなきゃよかったんだ」

ノギ 「でも、外にいれば汚れるのがわかっているのに、自分から外に出ることなんて

出来やしないだろう？ そんなこと考えもしない。だったらこんな目玉、ない

のと変わらないそうだろう？ 何にも見てないんだ・・・見たくないんだよ。汚

れてしまった私の顔を体を、好き好んで見たいと思うか？」

ニゴリ 「そうかい。それでもまだ、自分はピュアだとのたまうのかい？」

ノギ 「ああ」

ニゴリ 「広げた綿の上」

ヨゴレ 「で、綿々と思いを重ねることだけ」

ニゴリ 「で、日々は過ぎ去っていくと考えている」

ノギ 「ああ、そうだ」

ヨゴレ 「考えて」

ニゴリ 「閉まったんだ」

ノギ 「ああ」

ヨゴレ 「絶対に失くなるはずのない目玉を隠して」

ニゴリ 「瞼」

ヨゴレ 「を塞ぎ」

ニゴリ 「響くノックに目を背ける」

ノギ 「そのなにかいけない！？ ノックなんか無視すればいい！ 誰もドアの中に

は入らない」

ヨゴレ 「ドアの中にはいないの？」

ノギ 「要らない。私の中には私しかいない。だって私はピュア」

ヨゴレ 「ピュアじゃないよ！」

ヨゴレ、ノギの体をさらに汚す。

ノギ、へ垂れ込む。

ノギを見下ろし、ニゴリ&ヨゴレ。

ノギ、怯える。

ヨゴレ、大きく手叩く。

静まり返る。

ニゴリ&ヨゴレ 「・・・もう夏になったよ。春はとうに通り過ぎた。思いを入れた鉄の心と焼ける日差しの思い出と、思い描いた甘酸っぱい景色をどこまでも広げてそれを純粹だと、いつまでのたまうの？ なあ？（ねえ？）」

激しいノックの音。

ノギ、呆然と、

ノギ 「・・・泥棒だ」

ヨゴレ 「泥棒だよ？」

ノギ 「薄汚れた手の泥棒」

ヨゴレ 「（手の平をノギに晒し、）ばっちいでしょ！」

ノギ 「・・・目を逸らす？」

ヨゴレ 「そうそう。その隙に一切合切盗んでいくよ」

ニゴリ 「方法は任せる」

ノギ 「・・・ねえ、私はまだ私なのかな？」

ヨゴレ 「私だよ？ 私は私」

祭囃子。

ニゴリ&ヨゴレ、再び祭りの風景に。

ヘン、ノギを発見して、歩み寄る。

ヘン 「ごめん、待ったかな？」

ノギ 「（汚れを気にして）いや、そんな事ない」

ヘン 「よかった、着付けに時間がかかったの」

ノギ 「そう」

ヘン 「どうかな？」

ヘン、その場を一回転。

ノギ 「うん。似合うと思うよ」

ヘン 「（少しムツとして）思うって何？」

ノギ 「（苦笑い）似合う。似合う。すごく、綺麗」

ヘン 「（照れつつ）ふうん。まあ、いいわ」

ヘン、ノギ、黙る。

ヘン、恥ずかしそうに俯く。

ヘン&ノギ「あの・・・」

ヘン「・・・なに？」

ノギ「・・・歩こうか」

ヘン&ノギ、祭りの風景をぐるりと回る。

初「あのお祭りの日のことを、よく覚えている」

晩「お囃子の中を二人だけで歩いた」

初「ゆっくり、ゆっくり」

晩「誰にも邪魔されないので嬉しくて」

初「二人だけなのが嬉しくて」

初&晩「金魚すくいをして、射的をして、それから、それから・・・」

盆踊りの風景。

その中に佇む、ヘン&ノギ。

四季「あの頃の思い出はとも色鮮やかで、

少しも色褪せない。

まるでたった今描いた油絵のように、

その質感も

匂いも

簡単に思い出せる。

提灯の朱色。

屋台の黄色。

太鼓の茶色。

あの子の着ていた上着は青だった。

私は朝顔の浴衣を着ていた。

ピンクと

青の朝顔が、

可愛らしく咲いていた」

ヘン「ねえ？」

ノギ「なに？」

ヘン 「手を繋いであげようか？」
ノギ 「え？」

ヘン、ノギの手を取る。
見つめ合う二人。

ヘン 「あのね、私。あのね・・・」
ノギ 「あの、私は・・・」

二人、互いの距離が近付く。
祭り囃子が遠くなる。
盆踊り、ゆつたりと流れる。

初&晩 「夏の日、私は――」

ヘン、ノギに何か言おうとする。
が、
ドドン

ヨゴレ 「お手手が、汚れちゃった！」

ヘン、ノギと離れ、自分の手を見る。
汚れている、ヘンの手。

ヘン 「・・・え？」

ヨゴレ 「綿菓子、いる??」

ヘン 「なに・・・？」

ヨゴレ 「ねえねえ、綿菓子いる??」

ヘン 「なにこれ!!!」

ヘン、ノギの体にすがり付く。

ヘン 「汚れた、汚れたわ、なにこれどういこと? どういうことよ!? ねえ、私?
私は私でしょ? じゃあ、なんで汚れているのよ。ねえ、なんで私まで汚れた
の!? 私はピュアなのよ!？」

ノギ 「ごめん・・・」

ヘン 「謝るの！？ 謝るのはなんで謝るの！？」

ヨゴレ 「怒るの良くないよお。甘い綿菓子でもいいかが？」

ヘン 「なんであんたがここにいるのよ！！！！ ここは思いよ！ 外じゃない！！」
ヨゴレ 「（ノギを指差す）」

ヘン、驚きの表情でノギをつかもうとするが、そこには誰もいない。

ヘン 「どこ？ どこにいるの？ 私。私はどこにいるの？」

ノギ 「ここだよ」

ヘン、違う場所を掴むがない。

ヘン 「どこ！？ 私はどこ！？」

ヨゴレ 「見えないの？ こんなしてるから見えないんだよ？」

ヨゴレ、ヘンの目隠しを外す。

驚愕するヘン。

目を自分の手で隠す。

ヨゴレ 「よく見えるでしょ？」

ヘン 「返して！」

ヨゴレ 「なんで見ないのさ？」

ヘン 「何にも見ないわ！」

ヨゴレ 「目玉はそこにあるのに？」

ヘン 「そんなものは——」

ノギ 「捨てられないんだよ」

ヘン 「捨てたのよ！！！！」

ノギ、ヘンを掴む。

ヘン、驚きノギを見上げる。その顔は汚れている。

ノギ、ヘンをジッと見つめて離さない。

ヘン 「・・・私の夏はどこ？」

ヨゴレ 「そんなのないよ？」

ヘン 「・・・あの子はどこ？」

ノギ 「誰もいない」

ヘン 「そんなの嘘」

ノギ 「嘘だろ？」

ヨゴレ 「元々嘘でしょ？」

ヘン 「嘘よ！！！！」

ヘン、ノギの手を振り払い、再度うづくまる。

そこにニゴリ登場。手頃な棒を持つてくる。

ニゴリ 「どうだい、こいつで綿菓子を作るってのは？」

ヨゴレ 「いいね！ 綿菓子作ろうよ！」

ニゴリ&ヨゴレ、二人で棒を使って綿を集め始める。

その最中、ノギ、ヘンの傍らに。

ヘン 「こんな目玉は知らないわ。こんな目玉があるから汚れるのが見えるのよ。だつ

たらこんな目玉は要らない。ねえ、そうでしょう？」

ノギ 「でも、もう、どうしようもない」

ヘン 「ねえ、私は告白したの。そうでしょう？ 告白したのよ、あの夏の日に。お祭りの日に」

ノギ 「・・・してないよ」

ヘン 「したわ！ 好きだって言ったもの。そうしたらあの子も好きだと言ってくれたわ！」

ノギ 「言われてないよ」

ヘン 「嘘だ！ 嘘嘘嘘嘘、みんな嘘！ 目玉はいつも嘘をつく！ 顔の前についているくせにいつも後ろ向きなことしか見せない！ 顔の後ろについていれば良かったのよ！ そうすれば前のことなんか気にしなくて済んだのに！」

そうよ・・・前に目玉が付いているから・・・後ろに付いていたら、こんな汚れを見なくて済んだのに！！！！！！」

ノギ 「ねえ、私は誰に告白したの？」

ヘン 「私は告白したの」

ノギ 「誰に？」

ヘン 「私は告白したのよ！」

ノギ 「だから、誰に！！！！」

ヘン、答えられず、その場にうづくまる。
周囲の綿がなくなる。

ニゴリ&ヨゴレの足元には汚い綿の塊。

ニゴリ 「いる？ 綿菓子？」

ヨゴレ 「でもきつと、美味しくないよ？」

ヘン、うずくまっている。

ノギ、ぼんやりとニゴリとヨゴレを眺め、

ノギ 「雨だ」

雷鳴の音。

やがてそれは電車の車輪の音へ。

【盲目的な秋に関する現実的な考察】

列車の音。規則的に続くリズム。

駅。人々の往来。

四季、トランクを抱えて登場。

ホームに佇む。

しばしして、列車が駅に入ってくる。

四季、列車に乗り込む。

四季、さわやかな顔をしながら、

初 「トランクの中に思いを込めて、私は列車に乗り込む。何処へ行くあてもない

旅。きつと、この特急列車に乗り込めば」

晩 「私の行くあても決まる。きつと決まるのだと、思う」

初 「秋は体がどこか軽くなり、体の芯に残る夏の重たい蒸し暑さをゆっくりとさ
らっていく、秋の、風。さらり、ふわり、ゆらり。黄金色の稲穂の中を駆け
抜ける特急列車の窓を開ける」

晩 「とたんに流れ込んでくる、さらり、ふわり、ゆらり。私の前髪を撫で、頬を
触れ、肩口にそっと寄り添い去っていく」

初 「どこか乾いているくせにどこか人懐っこい。それはきつと」

晩 「秋の向こうに冬がいるからだ冬は寂しい季節」

初 「だから、その前触れの秋はこんなにも人の周りから離れない」

晩 「離れないと決めたのに、どこか、別れの匂いを感じるのを感じていたわ。ええ、
だって、この匂いは別れの匂い。何度も何度も出会っては別れる。そういう
ものよね」

初 「そういうもの。特急列車の窓の外にいくとも流れる黄金色の風景。稲穂。ス
スキ」

晩 「かたわらの夕焼け色のトランクにたくさん込めた」

初&晩 「私の思い」

初 「思いを込めて列車は走る」

晩 「何処に向かうのかしら？」

初 「この列車はどこに向かうのでしょうか？」

晩 「わからない」

初 「わからないけれど、思いのこもったこの旅路はいくらか多くの期待で溢れて
いる。私のトランクから溢れてくる。込めた、思いが」

ドアの開く音（列車のドア）。
ニゴリ、車掌に扮する。

ニゴリ 「切符を拝見いたしませう」

座席にはムー。

ムー、切符を差し出す。

ニゴリ、それを受け取る。が、

ニゴリ 「お客さん、違いますよ？」

ムー 「え？」

ニゴリ 「列車をお間違えです」

ムー 「そんなはず無いわ」

ニゴリ 「いいえ、残念ながら」

ムー、不満げ。

ニゴリ、ふと、トランクに目を移す。

ニゴリ 「おや？ これはたくさん込めておいでだ」

ムー 「ええ。それはもうたくさん込めたもの」

ニゴリ 「どんなものを？」

ムー 「思いよ。思いを込めたの」

ニゴリ 「では、それも拝見してよろしいですか？」

ムー 「なぜ？」

ニゴリ 「中身によっちゃあ、この列車でも問題ないかもしれない」

ムー 「ええ、それなら構わないわ。ご覧なさいな私の思い」

ニゴリ、トランクを開く。

中身には汚れたぬいぐるみ。

ムー、少なからず驚く。

ニゴリ 「おやあ、こいつはダメだ」

ムー 「（思いも寄らない）え？」

ニゴリ 「だって、あなた、これはぬいぐるみじゃあ、ないですか」

ムー 「（適当に同意）ええ。ぬいぐるみよ」

ニゴリ 「これじゃあ、ダメですよ。やっぱり、この列車じゃない」
ムー 「じゃあ、私はどの列車に乗ればいいのかしら？」
ニゴリ 「あちらの列車です」

ニゴリ、指をさす。

そこには地下鉄の駅のホーム。

アナウンスが聞こえる、

ざわめき。

その中にノギ&ヘン。

ノギ&ヘン、つり革を持ったポーズで止まっている。

ムー 「あら、あれは私ね」

ニゴリ 「ええ、私です」

ムー 「私があそこにいるなら、私はこの列車で構わないのじゃないの？」

ニゴリ 「そうもいかないんです」

ムー 「なぜ？」

ニゴリ 「あの私をよくご覧なさいな」

ムー、目を凝らす。

ふと、気が付く。

ムー 「あら、目玉があるわ」

ニゴリ 「目玉があるんです」

ムー 「じゃあ、あれは私じゃないわ」

ニゴリ 「いいえ、あれは確かに私です」

ムー 「いいえ。あれは私じゃないわ」

ニゴリ 「じゃあ、誰でしょう？」

ムー 「そんなの知らないわ」

ニゴリ 「知らない？」

ムー 「知らないわ」

ニゴリ 「そうですか」

ムー 「そうよ」

ニゴリ 「でも、お客さん、あなたはやっぱりこの列車じゃないですよ」

ムー 「(怒る) しつこいわね！ 私はこの列車に乗ったの！ 切符も持ってる！ 私は

この列車に乗るの！ 誰がなんと言おうと関係ないわ！」

ニゴリ 「・・・そうですか。ではどちらに向かうのですか？」

ムー 「決まってるじゃない、それは——」

四季（晩秋） 「どこまでも行こう。たとえ一人になっても構わない。一人ぼっちは旅の道連れ。それがわかっていれば一人も辛くない。だから、どこまでも、どこまでも行こう。いずれきつと出会えるわ。素敵な人。素敵な場所。素敵な風景。一人だからこそ、私は私の好きなことが——」

ニゴリ 「できると？」

ムー 「ええ、そうよ」

ニゴリ 「（ヘン＆ノギを眺め）あの私は二人です」

ムー 「ええ、そうね。二人ね」

ニゴリ 「あなたは一人なんですね？」

ムー 「ええ、はじめから一人よ」

ニゴリ 「素敵な場所へ？」

ムー 「ええ」

ニゴリ 「ぬいぐるみを持つて？」

ムー 「・・・そのぬいぐるみは」

ニゴリ 「私のじゃない？」

ムー 「ええ」

ニゴリ 「じゃあ、誰のですか？」

ムー 「知らないわ」

ニゴリ 「人のですか？」

ムー 「ええ、そうでしょう？ 誰かの他の人の物」

ニゴリ 「（驚き）本当に？」

ムー 「ええ、そうでしょうよ」

ニゴリ 「・・・」

ムー 「・・・なに？」

ニゴリ 「盗んだんですか？」

ムー 「え？」

ニゴリ 「盗んだんですね？」

ムー 「盗みやしないわ。そんな汚いぬいぐるみ」

ニゴリ 「汚いぬいぐるみを、自分の物だと言わないのなら、あ

なたはこれをどこぞで盗んだんですね」

ムー 「どこぞはどこよ？」

ニゴリ 「途中で寄った、思いの中で」

ムー 「なんで私が盗むの？」

ニゴリ 「他の私が思いを寄せたからでしょう？」

ムー 「じゃあ、それは私じゃないわ。私はそんなものに思いを寄せたりしない」

ニゴリ 「じゃあ、寄らなかったんですね？」

ムー 「思いには寄らなかったわ」

ニゴリ 「どこに行くんです？」

ムー 「決まってるじゃない。あそこよ」

ニゴリ 「どこ？」

ムー 「あそこ」

ニゴリ 「（ヘン＆ノギを指し）そこですか？」

ムー 「ちがうわ。あの向こう」

ニゴリ 「向こうには何があるんです？」

ムー 「秋よ。飽き飽きした秋。でも、飽きない秋」

ニゴリ 「開きますよ」

ムー 「飽きないわ秋ですもの」

ニゴリ 「いいえ、その秋じゃなく」

ムー 「え？」

ニゴリ 「ほら、ノック」

ノックの音。

ドンドンドンドンドン！！！！

電車の開放音。列車のドアが開け放たれる。

激しく唸る列車の轢音。

列車が大きく揺れる。

一瞬の暗転。

明転。

ムーのそばにヘン＆ヨゴレ、つり革のポーズ。

穏やかな列車の音。

初 「どこまでも行こう」

晩 「たとえ一人になっても構わない」

初 「二人ぼつちは旅の道連れ。それがわかっていれば一人も辛くない。だから、どこまでも、どこまでも行こう」

晩 「いずれきつと出会えるわ。素敵な人」

初 「素敵な場所」

晩 「素敵な風景」

初 「一人だからこそ」

初&晩 「私は私の好きなことが――」

ヘン 「（ムーに）どちらまで？」

ムー、聞こえないふり。

ヨゴレ 「ねえ、どちらまで？」

ムー、無視。

ヘン 「ねえ」

ヘン、ムーに触ろうとする。

ムー 「触らないで！！」

ヘン、驚くがムーから視線を外さない。

ヘン 「なんでそんなこと言うの？」

ムー 「だって、あなたの手はなに？ そんな手で触らないで」

ヨゴレ 「あなたじゃないわ」

ムー 「あなたはあなたでしょう？ 私に触れないで。あなたの汚い手で」

ヘン 「・・・」

無言の三人。

ヘン 「私は触られたのよ。そして、目玉がここにあった。捨てたのに。捨てたはずの目玉はしつかり私の顔の前にはまっていた」

ムー 「何？ 話しかけないでもらえる？」

ヨゴレ 「ねえ、あなたはなんで私をあなたと言うの？ おかしいじゃない。私は私ですよ？ 私は私だった」

ムー 「（鼻で笑い）私は私。あなたじゃないわ。ねえ、やめてくれる？ せつかくの景色が台無し。どこかに行ってちょうだいな」

ヘン 「・・・どちらまで？」

ムー 「ちよっとそこまで」

ヨゴレ 「この列車はどこまで行くの？」

ムー 「どこまでも」

ヘン 「いいえ。すぐに着くわ」

ムー 「どこに？」

ヘン&ヨゴレ「駅」

ムー「そう、じゃあ、あなたはそこで降りて。私はまだ降りないから」

ヘン「ずっと乗っていくの？」

ムー「ええ。この列車には終点はないの」

ヨゴレ「思いを込めてぐるぐる回るの？」

ムー「回らないわ。どこまでも行くの」

ヘン「いいえ、ぐるぐる回っているわ」

ムー「うるさいわね。静かにしてちょうだい」

ヘン「でも」

ヨゴレ「ほら、止まるわ」

列車、動きを止める。

ムー、はっとする。

ヨゴレ「降りましょう」

ムー「降りないわ」

ヘン「いいえ、降りるの」

ムー「降りないわ。このまま私は秋に行くの」

ヘン、汚れた四季を眺める。

ヘン「秋なんて、もうどこにもないわ」

ムー「ばかね。秋はあるわ。私が向かう場所だもの。そこに秋があるの」

ヨゴレ「じゃあ、ここから降りれば秋に行けるね」

ヘン「確かに、そこが秋ね」

ヨゴレ「飽き飽きした秋ね」

ヘン「じゃあ、秋が空いているか確認しましょう」

ヨゴレ「そうね。ノック」

ヘン「しましう」

ドンドンドンドン。

電車の開放音。列車のドアが開け放たれる。

激しく唸る列車の轢音。

列車が大きく揺れる。

一瞬の暗転。

明転。

ムーのそばにノギ。

ノギ 「泥棒が入ったんだ」

ムー 「あら、そう」

ノギ 「私がドジを踏んだ」

ムー 「あら、そう」

ノギ 「ドジしなきゃよかったんだ」

ムー 「あら、そう」

ノギ 「ごめん」

ムー 「・・・？」

ノギ 「ごめん」

ムー 「なんで謝るの？」

ノギ 「もう、ピュアじゃない」

ムー 「ピュア？ そうね、私は純粹だわ」

ノギ 「ドアが開いたよ」

ムー 「私はピュア。あなたが言うように。純粹で」

ノギ 「清廉で」

ムー 「潔白な」

ノギ 「ピュア」

ムー 「わかってるじゃない」

ノギ 「でも私はピュアじゃない」

ムー 「そう。じゃあ、降りなさいな」

ノギ 「ねえ、もう降りよう」

ムー 「なぜ？」

ノギ 「だってほら、秋は濁って汚れてる」

以下、四季のセリフと、ほぼ同時。

初 「あの服を・・・洗わないと」

ムー 「え？」

ノギ 「汚れてる。もう、ピュアじゃない。秋の風景はただの思い込み」

晩 「クリーニングはいつしうか。明日出したらいつ帰ってくるんだっけ？」

ムー 「思い込みなんかじゃない。この列車はどこまでも行くの」

初 「今朝出せば・・・ああ、夕方には戻ってきてたのか」

ノギ 「ううん。ぐるぐる回るだけ。ぐるぐる回ってどこにも寄らない」

晩 「ネギ、買わなきゃ・・・きのこは？ まあ、いいか」

ムー 「いいえ、この列車はどこまでも行くの。ほら、黄金色の稲穂」
ノギ 「あれは黄色のカゴ」

列車の音に混じり、レジ打ち音が混ざり始める。

初&晩 「ピロ。ピロ。ピロ。灰色のかごから黄色のかご。こう毎日繰り返していると、
自分がどっち側にいるのかわからなくなる」

ドアの開く音。

車掌に扮したニゴリ、ムーのそばに。

ニゴリ 「切符を拝見いたします」

ムー、ニゴリに切符を差し出す。

ニゴリ 「お客さん、違いますよ？」
ムー 「え？」

ニゴリ 「列車をお間違えです」

ムー 「そんなはず無いわ」

ニゴリ 「いいえ、残念ながら」

ヘン&ヨゴレ登場。

ヘン 「・・・どちらまで？」

ムー 「ちよつとそこまで」

ヨゴレ 「この列車はどこまで行くの？」

ムー 「どこまでも」

ヘン 「いいえ。すぐに着くわ」

ムー 「どこに？」

ノギ 「どちらまで？」

ムー 「ちよつとそこまで」

ヨゴレ 「この列車はどこまで行くの？」

ノギ 「どこまでも？」

ムー 「ええ、どこまでも」

ヨゴレ 「どこまでも行かないよ」

ムー 「いいえ、どこまでも」

ニゴリ 「そこまでではなく？」
ムー 「じゃあ、そこまで」
ヘン 「そこには何もないわ」
ムー 「じゃあ、何があるの？」
ヨゴレ&ヘン&ノギ&ニゴリ 「駅」
ムー 「駅なんてないわ」
ニゴリ 「いいえ、ありますよ」
ムー 「どこに？」
ノギ 「ほら、あそこ」
ムー 「見えないわ」
ヨゴレ 「目があるのに？」
ムー 「そんなもの無いわ」
ヘン 「いいえ、ここにある」
ムー 「あつたとしても後ろの方よ」
ノギ 「駅？」
ヨゴレ 「それとも目玉？」
ニゴリ 「お客さん、もうすぐ着きますよ」
ムー 「なにも付いていないわ」
ヘン 「いいえ、もうすぐ着くわ」
ノギ 「もう付いている」
ムー 「なにが？」
ヨゴレ 「駅に」
ムー 「そんなもの、あつたとしてもまだ先よ」
ヘン 「どのくらい？」
ノギ 「どのくらい先？」
ヨゴレ 「ここからどれくらい前？」
ムー 「そうね、あと一時間ぐらいでしょ」
ヨゴレ 「ううん違うよ」
ムー 「じゃあ、どのくらい？」
ヨゴレ&ヘン&ノギ&ニゴリ 「各駅停車の駅間隔は、およそ、二分」
ムー 「え？」

以下、ノギ、ヘン、ムー、ニゴリ、ヨゴレは動作。
四季はその最中ぼそぼそとしゃべり続ける。

初&晩 「朝、いつもの億劫な光が差し込む。ああ、今日が始まる。めんどくさい。適当

な格好をして家を出る。シンクを横目に見る。ああ、昨日の食器がそのままだ。昨日？ 一昨日だっけ？ まあ、いいや。電車のホームのいつもの位置。乗り換えを考えて大体このあたりだ。空が曇ってる。中学生の服が冬服になってる。もうコートを羽織ってる人がある。早すぎでしょ？ 悪目立ちしてるよ。笑える。電車の中は今日もぎゅうぎゅうに詰まってる。暑いし、苦しいし、臭い。し。あ、でもそれもずいぶん前から考えてるけど……。決断力ないなあ。まあ、いいか。ご飯どうしょ……。」

列車の発車音。

地下鉄のアナウンス。

人々のざわめき。

満員電車の様相。

ギューギューに詰まる一同。

列車の停車音。

電車から降りる一同。

ムー、ぼろぼろであり、汚れている。

再度、列車の発車音。一同乗り込む。

アナウンス。

満員電車。

停車音。

一同、電車から降りる。

ムー、さらにぼろぼろに。

再度、発車音。

その後、何度かのループの後、

ムー、電車から降りる。

一同 「いらっしやいませー！！！！」

スーパールの音声。
レジに立つムー。
一同、客となって、レジの前を往復する。

初 「買っているのか、売っているのか」
晩 「売っているんじゃない、打ってるんだ。何を？」
初 「レジを」
晩 「うまいね」
初 「うまくない」
晩 「ちつともうまくいかない」
初 「うまくいったこと、あった？」
晩 「ないかな」
初 「じゃあ、別にいいんじゃない？」
晩 「いいか」
初 「そっか」
初&晩 「気付けば私はレジに立っていて。今日もバーコードを通していく」
初 「こっち側なんだか向こう側なんだか」
晩 「買うのか売るのか」
初 「打つのか」
晩 「鬱なのか」
初 「どうでもいいような毎日」
晩 「まあ、どっちでもいい毎日だ。そう。そういう毎日なんだ」
ムー 「ぐるぐる回る日常の風景の中で、私は私のことをただひたすら考える。だけど、その思考は存外、純粋な自分の物であるということではなく、実際は誰か他の人のものであったりするわけで、じゃあ、ここにいる私は混ざり合いの中で作られた偽物であるというわけで。じゃあ、私の物はどこにあるのか。目の前を移動する人。目の前を右往左往する人。じゃあ、このどれもが、私なのかもしれない。であるならば、保持する私自身とはどこにいるのか純粋な私はどこにいるのか」

ノックの音。
ハッとするムー。
知らぬ間に周囲には四季以外誰もいない。
目隠しを外す。四季と目が合う。

ムー、自分の手を眺める。汚れた手。

ムー 「ああ、また汚れてしまった。私は誰かの物なのだろうか。誰かの私物なのだろうか。私の思考は結局のところ、私自身で保持することはできないのだろうか？ 私は誰かの言葉で汚れ、誰かの言い分で濁り、きっと、本当の自分というものなど一切持つことなど出来ることなく、盗まれ続けるのだ。そうしたら、結局は、残った私だと思える物に縋るしかないじゃないか。

思い縋り、思い詰めて、思い思いの思いを広げ、思い入れた物を思い出し、憧れを思い描いて思いを寄せた盗品の未来を、絶対にやってくる未来だと思い込み、思い違いを重ねていることに気付いた時、私はこのドアを開けることしかできないじゃないか」

ムー、ゆつくりと、ドアノブに手掛けようとする。
が、

ヘン 「嫌！！！」

ヘン、ムーに組み付き、ニギリ&ヨゴレから距離を取る。

ヘン 「やっぱり嫌。こんなの嫌よ！ お外に行っても何も無い。お外を見ても何も無い！ じゃあ、思いの中にいましょうよ！ 邪魔されても、何が何でもここにいまししょうよ！ なんて、ドアを開けるの！？ そんなのしても苦しいだけでしょ？ 盗まれてもいいじゃない。おんなじ思いを擦り切れてボロボロになるまで見ていましょうよ！」

ヘン、目隠しを差し出す。

ヘン 「ほら、そんなところに目玉はないわ。その目玉は見えないの。開かないの。しっかりと閉じて、濁った目玉なんて最初からなかったことにしちゃえ挺好的の。前を見てようが後ろを見ていようが関係ない。閉じちゃえば、見ることも自体がなかったことになるんだから！」

ヘン、ムーに目隠しをしようとする。が、それをノギが止める。

ノギ 「ダメだ」
ヘン 「なにをするの」

ノギ 「もうダメだ。そんなの」

ヘン 「あんたはもう私じゃない」

ノギ 「いいや、私はまだ私だ」

ヘン 「やかましい！！ そんな頭の先から汚れまみれた私なんか、私であるはずがないでしょう！？ 瞼を開いて汚れてるなら、あんたはもうピュアじゃない。それが偉そうに私を止めるな！」

ノギ 「でも、こんなもうどうしようもないだろう！？」

ヘン 「うるさい、知らない、どうでもいい。私の言うことなんて私は聞かない」

ノギ 「私の言うことを聞けよ！」

ヘン 「嫌だって言ってるの！！！！」

ヘン、ノギを振り払い、ムーのそばに。

ヘン、ムーに目隠しを――

ノックの音。

三人、ぱっと反応する。

ヨゴレ 「お届け物です」

ヨゴレ、ニゴリ、ぬいぐるみを抱えて登場。

ヘン、明らかな敵意。

ニゴリ 「お嬢さん、ダメでしょ。いい子にしなきゃ」

ヘン 「何か用？ もう決めたの。私は汚れていないことにする」

ヨゴレ 「いやいや何言ってるのさ」

ノギ 「そんな汚れじやないことにはできない」

ヘン 「出来るわ！ 何、なんなの！？ みんな私面（わたしづら）するの？ バカじゃないの！？ そんな姿で私を名乗るな！！！！」

ニゴリ 「随分ご乱心だ」

ヨゴレ 「いいものを持ってきたのにねえ」

ニゴリ 「出来上がったんだ、思いの詰まったぬいぐるみ」

ヨゴレ 「これは、私でしょ？」

ニゴリ&ヨゴレ、ぬいぐるみを立たせる。

その姿は汚れてボロボロである。

その姿を見て、ヘン、おののく。

ヘン 「違う違うわ。私はそんなじゃない!!!」

ヘン、ぬいぐるみに飛びかかろうとするが、ノギ、ヘンを押さえる。
ヘン、しばし抵抗するが、やがて力なく、うずくまる。

ニゴリ 「届け物は渡し物」

ヨゴレ 「私の物」

ムー 「これが、私・・・？」

ニゴリ 「そうさ」

ムー、ぬいぐるみに触る。

ゆっくりと撫でるように触れる。

ムー 「思い思いの私の思い」

ニゴリ 「思い思いの思いの思い」

ヨゴレ 「思って思い思いを重ねて」

ノギ 「重なる思いは全部が私」

ムー 「全部の私は思いの重なり」

ニゴリ 「思い詰まった私を広げ」

ヨゴレ 「思いの入った思いを開く」

ムー 「思い描いた思いを出して」

ノギ 「思いを寄せた思いを込める」

ヘン 「違う!!!!!!」

ヘン、ぬいぐるみに組みかかる。

ヘン 「こんなのが私なわけじゃないじゃない! こんな汚いの私じゃない! 私じゃないわ!? だってそうでしょう!? ねえ!!!」

ヘン、ぬいぐるみに馬乗りになり、うなだれる。

ヨゴレ 「私は私じゃないなら、誰が私なの？」

ヘン 「(か細く) 知らない」

ヨゴレ 「知らないのは知ろうとしないの? 知らないのは知らないのじゃなくて、知っているから知らないと言うのでしょうか?」

ヘン 「うるさい」

ヨゴレ 「思いはどこまでもピュア。外はいつまでも汚れる。塗れて澱んで濁ってく。じ

ゃあ、思いも汚れるんじゃないの？ 皮に付いた汚れは、どんどん染み込んで、

私の綿も汚してく」

ヘン 「だからって、汚れるのを我慢しろって言うの！？」

ニゴリ 「ああ、我慢しろというよ」

ヘン 「そんなの嫌。そんなの嫌よ！」

ニゴリ 「でも、今の私の思いを見て、誰も私をピュアだとは言わないよ」

一同、ヘンを見つめている。

ヘン、何か口にしようとするが、何も言えない。

ノギ 「・・・受け入れるしかない」

ムー 「そうね。そうするしかない」

ノギ 「ないことには出来ない」

ムー 「それはどれ？」

ノギ 「どれ？」

ムー 「ピュアな思い？ 私の綿？ 汚れ塗れた外？ 濁り澱んだ目玉？」

ノギ 「・・・どれだろう？」

ムー 「・・・どれかしらね？」

ヘン 「(ぼんやりと)・・・私はピュアだった」

ムー 「・・・いいえ、今もピュアよ」

ノギ 「そうさ、塗(まみ)れて汚れただけ」

ムー 「重なり連なり綿々と」

ノギ 「広がる綿は膨らんで」

ヘン 「私の思いは思いの中に」

ムー 「外には出ない思いの中に」

ノギ 「清廉潔白、純粹の」

ヘン 「思いの綿はどこまでも」

ムー 「私は私の思いを重ねる」

ノギ 「思いは絶対外には出さぬ」

ヘン 「塞いだ目玉は何も見ぬ」

ニゴリ 「でも、瞼を開いた」

ヨゴレ 「固く閉じても意味はない」

ニゴリ 「些細なドジで元通り」

ヨゴレ 「さあ、目を開けよう」

ニゴリ 「目を開けて、塗れよう」

暗
転

ヨゴレ 「塗れた私を見つめよう」

ヘン 「・・・聞こえる」

ノギ 「なにが？」

ムー 「聞こえるわね」

ノギ 「だから、なにが？」

ヘン 「ノック」

5

明転

スーパ－の音。

佇む四季。

四季

「お箸はお付けしますか？ はい、かしこまりました！ こちらの肉まんは別にお入れますか？ え？ ご一緒で？ はい、かしこまりました！」

四季、ふと顔を上げる。

そこにある、ぬいぐるみ。

四季、ぬいぐるみに近寄る。

しばし、見つめて、ぬいぐるみを撫でる。

四季

「・・・思いの外、私は・・・」

四季、ぬいぐるみに向け手を上げる。

暗転

終